希
のぞみ

希　07

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15863513

R-18, ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
R18です！　そういうのが無理って人は飛ばしてください！！いちゃいちゃしてます。ずっといちゃいちゃです(笑)次のお話で、この話を読まなくてもわかるようにします。
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点
PixivさまのTwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

Table of Contents

希　07

※思い切り二人がイチャイチャしていますので、念のために改ページをします。

◇

　大好きな彼の腕の中でくちづけに酔う。
　離れると淋しくて、触れているとドキドキして、重なっていると蕩けてしまいそう。
　太い腕が自分の身体に回されて、感じる熱量が自分へ移ってくる。
　熱い。
　ヒュンケルが舌を絡めてくる。動きから察して自分の舌を差し出せば、吸い上げられて、舐め上げられて、息が上がる。気持ち良かったから彼にもすれば、ヒュンケルの吐息が唇から零れる。
　ぞくりと背筋が震えるのがわかる。
　私でも彼を翻弄できるのが嬉しくて、夢中でくちづけた。
　腰を撫でる手。
　くすぐったくて身を捩れば、反対の手が乳房に触れる。やさしく包むような大きな手。子猫が母猫の乳房を揉むようにふにふにと揉まれて、なんだかくすぐったい。
　胸も腰もくすぐったくて笑いそうだけれど、胸の先端に触れられるとくすぐったさが刺激に変わる。
「……ぅん」
「マァム、可愛い」
　変な声が出たタイミングでそう囁かれて……この変な声が可愛いってこと？　首を傾げるとヒュンケルが「もっと聞かせてくれ」

と耳元に囁く。
　甘い……完熟した果実よりも甘い声に、体の力が抜けてしまいそう。ヒュンケルに触れられるの、好き。
「可愛い？」
「ああ、可愛くて、綺麗だ」
　ヒュンケルの眼差しはいつもやさしいけれど、今は熱が籠もって熱いくらい。竃に入れられたチーズみたいに蕩けて焦げてしまいそう。
　愛しさを乗せた動きのためか、身体中を触られても嫌悪感はない。

　――――　相手がヒュンケルだから。

　ぴったりと彼の身体に抱き付いて、くちづけあう。
　気持ちいい。
　……気持ちいいけれど……でも、重くないかしら。不意に正気に戻る。なんとなく雰囲気で彼の身体に乗り上げたが、重いだろうしはしたない気がする。ワンピースはそれ程広がる形ではないから、膝頭が見えていた。
「……んっ」
　スカートの裾からヒュンケルの手が入ってきて、太腿を撫で上げた。
　剣だこのある少しばかりざらりとした大きな手。
　痛い訳じゃないけれど、恥ずかしさが後を追ってきた。
「マァム」
　名前を呼ばれて見上げれば、ヒュンケルの熱の籠もった瞳に射られる。くちづけられながら、腰を寄せられる。脚の間に感じる彼の熱。
　ぞくり。
　彼も感じているという証左に、胸が高鳴る。
　唇が離れ、身体も離れる。
　なんだか淋しくて蕩けたままヒュンケルを見上げれば、彼は困ったように笑うと己の上衣を脱いだ。鍛えられた逞しい身体。見惚れ

ていると、彼が胸元のボタンを外していく。
　白蝶貝のボタンはそれ程小さくはないけれど、花のように飾り切りがされているため扱いにくい。たどたどしく外していく様に羞恥が舞い戻ってくる。
　ヒュンケルが安堵の息を吐く。お臍の辺りまであるボタンがすべて外され、前を開かれる。ふるりと現れた自分の胸部を、彼が真剣に見つめていた。と、思っていたらいつの間にか抱き上げられていた。
「ベッドへ行こう」
「うん」
　彼の鎖骨におでこを当てて頷く。
　なんとなくぐりぐりとおでこを擦り付ければ、くつりと小さな笑いが耳元に届く。
「可愛いな」
　そんなことない、って思うけど、そう思われるのは嬉しいのでさらにぐりぐりとおでこでぐりぐりする。
　やさしい笑い声にドキドキしている間に、目の先には天井。
　寝台が軋む音がして、気が付くと目の前にはヒュンケルが現れる。
　嬉しくて微笑めば、微笑み返される。
　幸せ、ってこんな時に使う言葉だと思う。
　愛する人に愛されて、大事にされている。嬉しくて堪らない。
　覆い被されて、くちづけられる。
　まるでパン生地みたいに身体中を撫でられて、息が上がる。自分の身体って、こんなふうに形を変えるんだと不思議に感じてしまう。
「んん……」
　胸の先端に吸い付くヒュンケルの髪の毛を撫でる。気付いて見上げてくるヒュンケルは、猫のように目を細めてマァムの赤い木の実をわざとゆっくりと舐め上げ、そしてきつく吸い上げる。
「ぁ、ん……」
　ぴりぴりとした刺激が脳と下腹部に届く。
　これが、気持ちいいってことなのかな……

「マァム」
「ヒュンケル」
　名前を呼ばれて、呼び返す。
　それが合図のようにくちづけられる。
「っふ、んぅ……ん？」
　……気が付いたら全裸になっていた。
「……え？」
　恭しく膝頭にくちづけられ、そのまま唇が内太腿をなぞる。
え？　そんなところを？　と混乱しているうちにヒュンケルが両脚の付け根に顔を埋めていた。
「ぇぇえ？……っっん！」
　徐々に水音が響きだし、刺激が背筋を走る。
　気持ちが良いのか痛いのかくすぐったいのか、まったくわからない。
「っひゃ……ぁあ、ぁ……」
　脚の間を舐められながら、手が伸びてきて胸の先端も転がされる。なんだかなにがなにやらわからなくて、マァムは必死に枕に縋る。両手でぎゅっと枕の端を掴んで刺激を流そうとするが、それで合っているかどうかもわからない。
　脚ってこんなに開くの？
　なにをどう考えればいいのかわからなくなって、関係のないことを考えてしまう。
「んんっ！！」
　なにか身体に入ってきた。少し痛い。
「……痛いか？」
　痛いと言った訳ではないのに、ヒュンケルが顔を上げて尋ねてくる。「少し」と返せば、ヒュンケルは少し眉根を寄せた。そして、下腹部、へそ、鳩尾、心臓の上、左の鎖骨の上とくちづけながら上がってきた。
「今も、痛いか？」
　緩く指を動かされて顔を覗かれる。恥ずかしい。
「……い、痛くはないです」
　ヒュンケルの指が……身体の中に、入ってる？

ひゃ、ひゃぁぁぁああ。
母のレイラから聞いているから、夫婦とはそういうことをするものだと頭ではわかっていたが、わかっていると思い込んでいただけのようだった。こんなに、恥ずかしいことをするのぉぉお？
口がぱくぱくと開く。
「結婚式までにはもっと慣らさないといけないな」
ぽつりと零された独り言に「ひゃぁ」と小さな声が出る。
その間抜けな声を聞いて、ヒュンケルは微苦笑を浮かべた。
「……お、お世話を、かけます？」
恐る恐る言えば、ヒュンケルは声を出して笑った。
「いや、楽しいからいい」
楽しいのか？　ぱちくりと瞬けば、ヒュンケルが頬を染めて目を逸らした。
「すまん。変な言い方だな……マァム」
名前を呼ばれたから目を閉じる。
少ししてからくちづけられた。ヒュンケルとキスをするのも好き。濃厚なくちづけの合間に指をゆっくりと動かされる。内を探るような動きにキスに集中できない。
「……ぁ、ん……っん」
「気持ち、いいか？」
ヒュンケルが真剣に尋ねてくるが、こういう時にどんな顔をすればいいかもわからない。
「……た、たぶん？」
自分のことなのに疑問形でしか答えられない。
目を少しばかり見開いたヒュンケルの顔に、胸と身体がきゅんとする。すると、ヒュンケルの指を下腹部が締め付ける。
「んっ！」
きゅうきゅうと、自分の身体なのにわからない動きをするのが怖くて目を瞑ると、ヒュンケルが両のこめかみにくちづけてくれる。
しばらくして、身体が落ち着いた気がするので目を開くと、やさしい眼差しのヒュンケルがいた。するりと抜ける指に身体が無意識に震える。
「ヒュンケル……」

マァムが見ているのも気にせず、ヒュンケルが己の指を舐める。
「っひゃぁぁああ」
　変な声が出た。
　その指って、その指って！！
　顔を真っ赤にさせて混乱する私を抱き上げて、ヒュンケルは浴室に進む。もう両手で顔を覆うことしかできない。恥ずかしくて堪らない。
「……ゆっくり、慣れてくれ」
「……はい」
　浴室まで運ばれて下ろされ、ヒュンケルは脱衣所に出て行く。
マァムは身体を軽く流してから湯船に浸かった。ほうと零れる溜息に自分が息を詰めていたことを思い知る。

　夫婦って、あれよりもっと凄いことするのよね。

　ふと思ったことに赤面する。
　頭の中に先程の行為がぐるぐるする。このままだと湯中りをしてしまいそうだ。早めに出た方がいいかも、と思っていたらヒュンケルが浴室に入ってくる。
　目を見開く。
　体も動かなくてぽかーんと見つめていると、ヒュンケルが体を湯で流して湯船に入ってきた。
「マァム？」
　目の前に手のひらがひらひらとされて、ようやく体が動いた。
　体が動いた時には、既にヒュンケルが後ろから自分を抱き締めていた。遠慮なくその胸に凭れる。するとヒュンケルが肩を大きな手で包んでくれる。
「新婚さんみたいね」
　ふふっと笑えば、ヒュンケルも笑ってくれる。
「ああ……すまん。オレは自分がここまで性欲が旺盛だということを初めて知った」
　なぜか謝罪をされる。
　ヒュンケルのおでこが自分の左肩に乗っているのがわかった。

「そうなの？」
　首を傾げる。
「でも、それなら私も、たぶん一緒よ」
　ヒュンケルの頭に顔を寄せる。
「怖くて、恥ずかしくて、吃驚したけど……でもイヤじゃないもの。ううん、好き」
　抱き締める力が強くなる。
「結婚式まで頑張れるか自信がない……」
　弱々しく言われて、また首を傾げる。
「私はいいわよ？」
「いや、駄目だ」
　ヒュンケルは左肩におでこを乗せたまま。
「もしも子供ができたら、マァムを悪し様に言う輩が絶対にいる。不意の妊娠はほぼ男が悪いのに、口汚く罵られるのは女性側のが多いんだ」
　……よくわからないが、何かあったのだろう。
　彼は守ろうとしてくれている、私を。
　まだ育まれてもいない私達の子供を。
「わかったわ、ヒュンケル……ゆっくりで、お願いね」
「ああ」
「私、のぼせそうだから先に上がるわ」
　振り返って彼の頬にくちづける。
　ゴメちゃんへのお礼でちゅっとしたのを思い出す。ヒュンケルがゴメちゃんのように喜んでくれるのかわからないが……そう思いつつ見上げれば、彼の顔は真っ赤になっていた。
　先程まで、いろいろともっともっと凄いことをしていたのに。
　それがおかしくて笑ってしまう。
　湯船から出て、手早く体を洗う。それをシャワーで流して「お先に」とヒュンケルに声を掛けて脱衣所に向かう。予備のタオルがいっぱい置いてあるところは、さすがレオナが選んだ高級ホテルだ。
　ふわふわのタオルで体を拭く。
　新しい下着を身に着けて、先程のワンピースを着てもヒュンケル

は出てこない。どうしようか悩んだけれど心も体もふわふわしていて眠気が凄い。
　おやすみって言いたいけれど、無理そうだ。
　マァムは寝台の右側に体を落ち着ける。真ん中に寝ないで、もう一人寝られるように開けておくことにもふわふわする。
　ふわふわな寝具にふわふわの気持ち。
　マァムは自分の上と下の瞼がくっつくのに任せて、そのまま夢の世界に旅立っていった。

「おやすみなさい」

◆

「……マァム」
　浴室に残されたヒュンケルは片手で顔を覆う。
　魅力的過ぎる己の伴侶ににやけが治まらない。みっともない顔になっているのは自覚できる。
　これからも、予行練習の時に下半身を脱ぐのは止めよう。
　きっと我慢ができなくなる。

　慣れない快楽に戸惑いつつも、小さな声を上げるマァム。
　しなやかでやわらかい肢体。
　困ったことに、彼女の媚態を思い出すだけでどれだけでも抜けそうだ。正直言って、今も痛くて堪らない。

　浴室からだいぶ出るのが遅くなりそうだ。
　ヒュンケルは遠い目をして、浴室の天井を見上げた。

続く